

令和2年度 学校自己評価システムシート (埼玉平成中学校)

目指す学校像	第一希望の進路実現のために必要な学力や知識を身につけさせるとともに、実践をとおして豊かな人間性を磨き、Society5.0の時代を迎える厳しい社会の中でたくましく生き抜くために必要な資質や能力を身につけさせる学校づくりを目指す。
--------	--

重点目標	AIの時代だからこそ必要とされる「人間力」を育てる 1 科学的思考力の育成 2 英語力を鍛える教育の徹底 3 コミュニケーション能力の強化 4 徹底した論理的思考力の育成 5 第一希望の進路実現 6 リモート教育の実践
------	---

達成度	
A	ほぼ達成 (8割以上)
B	概ね達成 (6割以上)
C	変化の兆し (4割以上)
D	不十分 (4割未満)

出席者	
学校関係者	3名
事務局(教職員)	4名

学校自己評価 令和2年度評価

番号	重点目標(評価項目)	現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	令和2年度評価				学校関係者からの意見・要望・評価等	
					中間 (9月30日現在)		年度末 (3月6日現在)			
					評価項目の進捗状況	達成度	評価項目の達成状況	達成度		
1	教科横断的思考力の育成	AIの時代に立ち向かっていくための総合的な視点に立った思考力が十分に身につけていない。 ・体験的な実践が十分ではない。 ・研究施設や博物館を訪問しての学習が十分ではない。	・埼玉大学STEM教育センターとの連携によるSTEM教育の推進する。 ・サイエンスイノベーションの取組として、近隣(高麗川)での水質調査を実施する。 ・地球観測センターへの訪問学習を実施する。	・STEM教育の成果 ・調査研究の発表の成果 ・サイエンスイノベーションの取組内容と成果 ・施設訪問学習のレポート	・センサーやモーターを利用し、プログラミングの基本を確認した。2学期にはその応用を実践した。 ・新型コロナウイルス感染症の影響で校外での調査が難しかったが、校内でできる代替学習を企画した。	A	・中2ではコロナ禍においてセンサーを利用した非接触で活用できる装置の考案をそれぞれの生徒が行い、模型を製作した。 ・代替学習として校内で、釘を使わない「ダヴィンチの橋」の作成した。 ・筑波のJAXA宇宙センターを訪問し最先端の宇宙工学について学習した。	A	・3年目を迎える埼玉大学STEM教育センターとの連携は第1期の完成年度となる。さらに教科横断的な教育の実践が課題である。 ・コロナ禍での状況を見ながら校外での調査活動等を充実していく。	STEM教育の授業は軌道に乗ってきている。コロナ禍の中、非接触で利用できるアイテムの考案は時代にとってもマッチしている。 校外での体験学習を実施するのが難しい中、JAXAを訪問し、校外学習ができたのは大変貴重な体験である。
2	英語力を鍛える教育の徹底	・スピーキングとライティングの力が十分に身につけていない。 ・英検で全員が目標級に合格できるようにすることが課題である。 ・海外の学校との交流を広げ、生きた英語に触れる機会を増やすことが課題である。	・English Station (英会話サロン) で検定のスピーキング対策を取り入れた会話練習を実践する。 ・英語絵日記を書かせることでライティングの力を身につけさせる。 ・学年縦断型の英検対策授業をさらに充実させ、それぞれの生徒の目標級合格を目指す。 ・オーストラリアやアメリカの学校との交流を広げ、手紙の交換等を通して、一人ひとりの生徒が生きた英語に触れる機会を増やす。	・英検の合格者数の結果 ・GTECの結果 ・海外の学校との連携	・夏期講習期間を利用し、第1回英検の2次面接練習を実施 ・夏休みの宿題として英語絵日記を課し、一番の思い出を英語で書かせライティングの力を身につけた。 ・夏期講習期間を利用し、オーストラリアのハイスールの生徒達とオンラインで英会話を楽しんだ。	B	・放課後のEnglish Stationを利用し、第2回英検の2次面接練習を実施した。準1級合格者を出すことができた。 ・2学期末に中学全学年と高2でGTECを実施した。中2、中3、高2の生徒はスピーキングも含めた4技能にチャレンジした。中学2年生1名がCEFR B2 高校2年生1名がCEFR B1の成績を取った。 ・10月、12月にも英語の授業内で、オーストラリアのハイスールの生徒達とオンラインで英会話を楽しみ、文化の違い等も学んだ。 ・オーストラリアのハイスールの生徒達にメールでクリスマスカードを送り、海外の慣例について学んだ。	A	・英検2次対策でのEnglish Stationの利用は素晴らしい成果を上げている。これからは平常時の放課後の利用を活性化していきたい。 ・自分の考えを英語で表現できる能力が求められる時代なので、英語の授業内や長期休業の課題で、自分の意見を英語で書かせる機会を増やす。 ・オーストラリアのハイスールとのオンラインでの交流を定例化していく。	オンラインを駆使してオーストラリアの生徒たちと英会話を楽しめたのは、とても素晴らしい取組である。 オーストラリアのハイスールとはこれからも交流を継続していくことが互いの国際理解につながっていく。 英検対策授業や面接練習の成果が準1級合格者を出すことができたという結果に結びついた。 これから時代は4技能の英語力が問われる時代なので中学生から積極的に取り組んでいるのは素晴らしい。
3	コミュニケーション力の強化	・自分の考えを表現する「言語力」をしっかりと身につけることが課題である。 ・人前で自分の考えを適切に伝えられる力が十分に身につけていない。 ・講話などで聴いた話に対し、自分の考えを持てるようになることが課題である。 ・日本語検定において全生徒の合格に向けての対策指導の時間を確保することが課題である。	・ノルティースコラ手帳の活用をさらに徹底し、日記の習慣を定着させる。 ・研究発表会で自分の考えを豊かな表現で発表できるように指導していく。 ・自分の考えをクラス内で伝えられる機会を増やし、主体的に学ぶ力を育成する。 ・講話や諸行事等での感想文指導を強化していく。 ・授業の中で対策のための時間を工夫していく。	・ノルティースコラ手帳の記録 ・研究発表会の成果 ・「主体的・対話的で深い学び」の実践 ・諸行事での感想文の成果 ・日本語検定の結果	・緊急事態宣言明けに担任からスコラ手帳の書き方講習をして、6月から使用し始め、習慣化することができた。 ・道徳の授業などを通して自分の考えをクラスの生徒に伝える機会を持つことができた。	A	・文化発表祭で「校内手帳甲子園」を企画し、日記の習慣を身につけさせた。 ・新型コロナウイルスの影響で今年度は多くの行事の中止が余儀なくされたが、オンラインで実施した講話などの感想を書かせる中で、自分の考えを入れる指導をした。 ・国語の授業内で対策学習の時間を取った。日本語検定1級の合格者を出すことができた。	B	・毎日欠かさずに日記をつける習慣が身につくよう指導し、日記欄に自分の意見を書けるように助言していく。 ・道徳等の授業内で自分の考えを発表できる機会を設け、講話や諸行事の感想文で自分の考えを文章でまとめられるよう指導していく。 ・日本語検定では、来年度もそれぞれの生徒が目標とする級に合格できるよう指導を継続していく。	生徒一人ひとりの考えを手帳や感想文にまとめさせるのは良い取組である。 道徳の授業等を通して自分の考えを相手に伝える意思表示の機会を増やしていくことが大切である。 日本語検定の1級合格は見事である。今後も検定の対策に力を入れて欲しい。
4	徹底した論理的思考力の育成	・生徒のプレゼンテーション能力を一層向上させることが課題である。 ・将来の大局的な視点に立った経営的な手法が十分に身につけていない。 ・教科横断的な思考力が十分に身につけていない。	・研究発表会の準備を6月からスタートさせ、指導する。(再掲) ・聴衆の前で発表できる技術力と組み立て方法を育成する。 ・経営シミュレーションゲームのCAPS、MESEを通して利益を出すための論理的な思考を鍛える。 ・STEM教育を通じた論理的思考力を育成する。(再掲)	・研究発表会におけるプレゼンテーション ・CAPS・MESEの取組の結果 ・STEM教育の成果 ・大局的なものの見かたの定着度 ・俯瞰的で、先を読んだものの見かたの定着度	・臨時休業明けの6月下旬から各自テーマ選考に向けた準備を始めることができた。 ・STEM教育を通して、結果を予測した論理的な思考の基にプログラミングをしていくことができた。	A	・中学生全員と高2生のS選抜生及びA進学生の希望者の合計37名が研究内容と自身の見解を論理的にまとめ、オンラインでの発表をすることができた。 ・オンラインを利用し、密を避けながら2学期末と3学期末にCAPSを実施し、論理的な思考力を高め、いかに利益を出していくかという経営感覚を身につけることができた。	A	・研究発表会は多くの保護者に見ただけのように土曜日に開催し、Youtubeの配信を実施した。来年度も土曜日での開催で調整していきたい。 ・今年度のCAPSでは学年の枠を超えたチーム編成を組むことができたので、来年度もその形を継続してたくさん生徒と意見交換できるように工夫していきたい。	社会人になると人前での発表・プレゼンの機会が増えるので、中学生の時からプレゼンに慣れたい。将来とても役立つはずである。 オンラインを利用して日頃子供たちの学校での様子が見られない祖父母の方々にも見ていただける機会ができたのはとても素晴らしいことである。
5	第一希望の進路実現	・自分の適性や力の把握が十分にできていない状況である。	・職業に対する意識を高め、仕事の具体的な内容について探求する姿勢を持たせる。 ・企業訪問を通して、自分の将来を見つめさせる。 ・卒業生の体験談を聞く。 ・スタディサプリを活用する。 ・学習支援センターを活用する。	・進路意識の定着 ・キャリアに対する意識を持たせる行事の企画 ・「卒業生を囲む会」の企画 ・進路実績	・緊急事態宣言下の臨時休業中もスタディサプリを活用した課題配信ができた。 ・オンラインで「卒業生を囲む会」を実施し、将来のことや大学受験に向けての心構えを身につけた。	A	・本校の卒業生がキャリア指導を担当している嘉悦大学からの協力を得て、中学の各学年でテーマを決めたキャリア学習をオンラインで実施し、生徒それぞれの将来を考えるきっかけを設けた。 ・南校舎の1Fに移動してきた学習支援センターを利用する生徒が少しずつ増えてきている。	A	・大学や有識者の講師との連携を保ち、キャリア学習や講演会を継続していきたい。 ・学習支援センターの有効活用を実践していく。 ・少人数ながら国公立大、GMARCH大学の合格を出せた進路実績を先輩たちへの指導に活かしていく。	オンラインを利用して、大学生の団体や有識者の先生によるキャリア学習が実施できたことは素晴らしい。 生徒一人ひとりが目標を持ち、先生方が目標達成のためのサポートをしていく体制を継続して欲しい。
6	リモート教育の実践	・コロナ禍の新しい生活様式で、インターネットを通じたオンライン授業を実践していくことが課題である。	・ZOOMを使用しているオンライン授業を実践する。 ・学校行事のリモート化の可能性を探る。	・オンライン授業の取り組み ・生徒会役員選挙、生徒総会などのリモートでの取り組み	・4月、5月とZOOMを利用しオンライン授業を実施し、学習進度の遅れを阻止した。 ・選挙、生徒総会、朝礼をオンラインで実施した。	A	・11月に校内展示中心に実施した文化発表祭のフィナーレをZOOMを使用して各教室に中継した。 ・2月の研究発表会の様子をYouTubeで保護者向けに配信することができた。	A	・コロナ禍で企業や施設への訪問が難しくなっているが、今年度実施できなかったことが来年度にオンラインでできるかを検討していく。	次年度もコロナ対応が必要になるだろうが今年度の取組が活かされるだろう。リモートでできることを継続して欲しい。

*STEM教育とは、アメリカのオバマ前大統領が推進した教育システムで、これからの時代を担う子どもたちに必要な資質を統合的に身に付けさせていくという先進的な取組です。「STEM」とはScience(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学)、Mathematics(数学)のそれぞれの単語の頭文字をとったものです。この教育は創造、変革、問題解決に必要な力を育てるもので、単なる理系科目教育やプログラミング教育ではなく、教科横断的に取り組み、社会や創造性と密接に結びついた生徒の主体性を育む総合的な教育システムです。